

学生会員の

声

●生まれた意味と化学工学 (Chemical Engineering) ●

今、車窓からは広大な砂漠が見える。つい1時間前に立ち寄ったケバブ屋の匂いがまだ服の繊維や髪に絡みついている気がする。この前は、葡萄畑とレンガ造りの小屋が織り成すのどかな田園風景がなんともヨーロッパの牧歌的で美しかった。隣の席にいたお爺さんと故郷の話で盛り上がった。さらに前は、前夜のメスカルが抜け切らない頭で、サボテンと岩肌が永遠に続く風景を砂塵に目を潤ませながら眺めていた。僕は頻繁に一人旅に出る。バックパッカーとでも言うのだろうか。そして、どこへ行っても何をしてもいつも思うことがある。僕は日本も含めたこの世界と地球が大好きだ。

子供のころから答えが出ず今もよく考えることが一つある。自分は何のために生まれたのかということだ。第二次成長期に入ると少年少女はそういった発想を頻繁に繰り返すことがあるという。ポジティブに捉えれば僕はまだまだ若いかもしれない。なんてふざけてみるが実際はそうじゃない。同世代の仲間達と同じように様々な経験をしてきた。部活動、学級活動、習いごと、受験、恋愛、小、中学校では喧嘩で呼び出しを食らって先生に雷を落とされ、親に殴られたこともあった。そんなごく普通の学生だ。

そんな僕が大学で化学工学に出会った。最初は、化学と名前がついているのにほとんど化学的な要素がなく、物理と数学で構成された学問で騙されたと嘆く日々を送っていた。しかし、その素晴らしさに気付かせてくれたのは、一生忘れない地球の反対側にいる友人達だ。時には世界で最も幸福な国と評される国から来た同い年の大学生、時には陽気な国から来た妻子のいる人生の先輩、時には資源はあっても紛争を繰り返す国から亡命している女性、時には言葉も通じないのに夜中に一緒に宿を探してくれた青年、今、目の前で僕にお茶を注いでくれている紳士。そして日本にいる自分の家族や友人、恩師も。こういった人達に「今、君は何を勉強しているんだい？」と聞かれたら「化学工学 (Chemical Engineering) だよ。わかるかい？」と聞く。大抵はわからないと返ってくる。そこで付け足して「石油やガ

スをみんなが使うには欠かせない学問だよ。エネルギーに限らず機械や化学材料の研究もしている。これも化学工学。」とってエアコンやスマートフォンを指してみる。するとみんな目を輝かせて、「君が～を救ってくれ！」とその国の様々な問題を教えてくれる。政治、宗教、工業、農業、ご近所トラブルを話してくれる人もいた。僕は、知っている知識の受け売りを話しただけのつもりでもいつもそう言われる。相手は単に話の種としてそういった論理の展開をしてくれているのかもしれないが、僕はいつもそれを聞いて、化学工学を真剣に学び、実践することに無限の可能性を感じてならない。以来僕は、授業や研究に“自分なりに”真剣に取り組むことができるようになった(注:先生、前も真剣でした)。特に研究に関しては学会に参加したり、企業や研究機関と共同で研究をしたり、特許の発明もできた。研究の面白い所は良いも悪いもすぐにフィードバックをもらえる所だ。学会に参加すれば、さらに広い分野からのフィードバックをもらえる。常にトライアンドエラーが立ち止まることはない。壁に当たりながら、軌道修正をしながら疑問や仮説が次々と頭に浮かんでは一歩一歩前に進んでいく。まさに、無限の可能性を感じる瞬間だ。

まだ誰も、どこかの国も救えたと思えたことはない。しかし、人類の歴史の小さな礎くらいにはなれたのではないかと思える。本当に小石程度の礎だが。この繰り返しがいつか、僕を応援してくれた誰か、どこかのためになれたらどれだけ幸せなことだろう。そう思うと、思うような結果が出ず腐りそうな時もフツフツとやる気が湧いてくる。

研究も一人旅も全てにおいて共通しているのは、どんな場面でも学びの瞬間になるということだ。研究には一つのプロセスを集中して考える瞬間も、全体のプロセスや研究計画を俯瞰して見る瞬間も必要になってくる。旅の中では、気を引き締めなければならない場面も、気を緩め自分をさらけ出す必要がある場面もある。どんな時も必要なのは常に柔軟に周りから学び取ろうとする気構えと、思考を止めないことだと思う。そう言った生活から、時として重要なヒントが得られる。学びが生まれる瞬間である。

小さい頃から何においても好奇心があるせいで親には迷惑をかけてきただろうし、今もこうやって周りに心配をかけながら世界中を旅している。2年前からは、IT技術の習得を目標に独学に取り組むようになった。大学に入ってから、週2、3日はジムに通って汗を流す。これに関しては悔しいが全然成果が出ていない。

化学工学を学び、無限の可能性に触れ、常に学ぶ。そして、自分の好奇心に従って時間を使い、自分の知らない世界を直接見て触れる。この生き方は僕に合っている。この生き方こそがいつか、この大好きな世界に生まれた意味を知る近道な気がするのだ。

(金沢大学大学院自然科学研究科自然システム学専攻化学工学コース
兼子 稔)